

立川断層の危険度予測について

予測発見戦略研究センター地震予測解析グループ

教授 尾形 良彦

地震調査委員会の立川断層帯に関するまとめ¹⁾は以下のように記述されている。立川断層帯は主に逆断層型でその平均的な上下方向のずれの速度は0.2–0.3m/千年程度と推定される。本断層帯の最新活動時期は約2万年前以後、約1万3千年前以前で、平均活動間隔は1万–1万5千年程度であった可能性がある。そして、立川断層帯では、将来マグニチュード7.4程度の地震が発生すると推定され、その際に北東側が相対的に2–3m程度高まる撓（たわ）みや段差が生じる可能性がある。本断層帯の最新活動後の経過率及び将来このような地震が発生する30年確率は0.5%～2%であるが、我が国の100を越える活断層の中ではやや高いグループに属することになる。

筆者は地震調査委員会「長期確率評価手法検討分科会」委員として統計的モデリング手法²⁾の検討に関わったが、本報告では立川断層のデータを例にとって、確率予測がどのようなモデルによってどのように計算されているかを解説し、今後の予測に関する提言などについて議論する。

文献

- 1) 立川断層帯の長期評価について

http://www.jishin.go.jp/main/chousa/03aug_tachikawa/index.htm

- 2) 長期的な地震発生確率の評価手法について（改訂試案）

<http://www.jishin.go.jp/main/chouki2/shuhou/main.html>

次ページは本キャンパス付近における立川断層推定図

